

『湯浅文書』に見る，科学者湯浅年子の終戦直後

著者	川島 慶子
雑誌名	化学史研究
巻	44
号	1
ページ	2-20
発行年	2017-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1476/00006511/

The Experience of Early Postwar Japan for Scientist Toshiko Yuasa as
Shown in Her Correspondence with Frédéric Joliot-Curie

Keiko Kawashima, Nagoya Institute of Technology

Summary

Scientist Toshiko Yuasa was a forerunner of the brain drain from postwar Japan. Yuasa went to France in 1940 during World War II and studied under Frédéric Joliot-Curie (1900–1958) of Collège de France, and then returned to Japan just before the end of the war in 1945, lived early postwar period in there, only to move back to France once more. This article introduces documents about Yuasa, for the first time in the world, which were donated by the family of Joliot-Curie to Bibliothèque Nationale de France in 2007 and are now available for inspection at the Curie Archive in Paris. This article follows Yuasa's trail, from her return to Japan and move back to France, through records from 1946 to 1949, centering on letters between Yuasa and Joliot-Curie. At the same time, the article depicts some aspects of the experience of Japanese intellectuals in the early postwar period

『湯浅文書』に見る，科学者湯浅年子の終戦直後

川島慶子*

1. 序

「貴方は私にとっては神に等しいお方なのです。」¹そう書いたのは湯浅年子（1909-1980），日本人女性として最初に国際的な活躍をした科学者である。「貴方」とは，湯浅が敬愛していた師，「ジョリオ先生」ことフレデリック・ジョリオ=キュリー（Frédéric Joliot-Curie, 1900-1958，以下ジョリオ，あるいはフレデリックとも記す），妻であり，キュリー夫妻（Marie Curie, 1867-1934, Pierre Curie, 1859-1906）の長女でもあるイレヌ・ジョリオ=キュリー（Irène Joliot-Curie, 1897-1956，以下イレヌまたはイレヌ・キュリーと記す）と共に人工放射能を発見し，夫妻で1935年度のノーベル化学賞に輝いたフランスの科学者である。湯浅は第二次世界大戦中の1940年に渡仏し，かの地でジョリオを師とした。先の手紙は，1945年にいったん帰国した湯浅が，1949年に再渡仏する船の上から師にあてた手紙の中の文章である。

本稿は，湯浅が残した，1946年から1949年までのジョリオ宛の手紙をもとにして，帰国から再渡仏までの湯浅年子の軌跡を追う。それは同時に，終戦直後の日本の知識人たちの状況の一端をも描き出すものとなるだろう。

2. 発見された湯浅年子の手紙

ここで，本稿で使用する湯浅史料について言及しておく。本稿の基本資料である，湯浅からフレデリック・ジョリオ=キュリーにあてたフランス語の手紙およびその関連資料（以後『湯浅文書』とする。付録参照）は，日本でも未発表のものである。多分ジョリオ本人とフランスの図書館員を除けば，これを読んだ人間は，私が世界で最初である。というのも，これらの史料は2007年にジョリオ=キュリー夫妻の子どもたち，エレヌ・ランジュヴァン=ジョリオ（Hélène Langevin-Joliot, 1927-）とピエール・ジョリオ（Pierre Joliot, 1932-）によってフランス国立図書館に寄贈され，それが整理されたのち，所属は国立図書館のまま，パリのキュリー博物館附属キュリー・アーカイヴでの閲覧が許可され

* 名古屋工業大学大学院工学研究科
連絡先: 〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町 名古屋工業大学 おもひ領域
ホームページ <http://www.ne.jp/asahi/kaeru/kawashima/index.html>
e-mail: kawashima.keiko@nitech.ac.jp

るようになったからである。つまり最近になって研究者が閲覧できるようになった史料である。では湯浅のほかの史料はどこにあるのか。

手紙や日記を含む湯浅の遺品は、彼女が 1980 年にパリで没した後、遺族によって、まずは湯浅の母校、お茶の水女子大学に送られた。そこで分類整理された後、科学論文および学会誌に寄稿した文章の下書きなど、公的な文書は大学に残されたが、手紙は可能な限り差出人に返却され、日記や両親の形見といった私物は遺族に返還された。お茶の水女子大学図書館が保管する湯浅アーカイヴの中身については、同図書館のホームページや目録に仔細が載っている²。つまり、湯浅が最後まで手元においていた日記や手紙のほとんどは、じつは現在は研究者の手の届かないところにある。他には、湯浅の最後の職場、原子核研究所のある、パリ郊外オルセーの CNRS（国立中央科学研究センター）の資料室にも湯浅史料が多数存在する。ここにあるものは、湯浅個人の研究上の文献と、彼女が最晩年に関わった日仏共同研究に関する文書である。これらは、1970 年代の日仏科学界の協力体制を物語る貴重な史料なのだが、整理のめどすらたっておらず、もちろん公開されていない³。

したがって、本稿で引用する、『湯浅文書』以外の、日本語で書かれた湯浅の日記や手紙は、湯浅本人が発表したもの、あるいは湯浅の後輩で、先の遺品整理にも関わった山崎美和恵が、遺族の許可を得て発表したもののみである⁴。さらに、パリの『湯浅文書』についても、同時代の本人の日記や手紙などの日本語史料が閲覧できないことから、事実確認のできない事柄については、公表を控えたものがあることを最初にお断りしておく。

3. 湯浅年子—日本初の国際的女性科学者

先にも書いたが、湯浅年子は国際的な活躍をした、日本で最初の女性科学者である。湯浅の前にも、近代科学教育を受けた日本人女性科学者はいたが、数々の国際会議の議長を務め、海外に広くその名を知られた最初の日本人女性科学者は湯浅である⁵。

湯浅年子は、1909 年（明治 42 年）12 月 11 日、東京の教養深い士族の家に生まれた。父親は東京帝国大学工学部卒のエンジニアで、母方橘家は代々和歌の名人を輩出した名家である⁶。年子は幼少期から、文理芸術のマルチな才能の持ち主だったが、一番興味を持っていたのは自然の不思議だった。

当時の日本では、女子が科学を学ぶことのできる教育機関は限られていたため、湯浅はまず東京女子高等師範学校（東京女高師）の理科に進学した。東京女高師卒業後は、当時めずらしい共学の大学であった東京文理科大学（東京教育大学の前身、現在の筑波大学）で、日本で最初の物理学専攻の女性学生とな

る7. ここで原子分子分光学を専攻し、卒業後は、文理大、東京女子大をへて、母校東京女高師の助教授となった。そして1938年ころのある日、ジョリオ＝キュリー夫妻による、人工放射能の発見に関する論文を読んで雷に打たれたような靈感を受けた⁸。この決定的「出会い」が、湯浅をフランスという遠い異国へと導くことになる。

湯浅は1939年にフランス政府給費留学生となったが、これは音楽以外でフランス政府給費生となった最初の日本女性でもある。ところが出発直前に第二次世界大戦が勃発し、渡仏が危ぶまれた。湯浅は大使館と交渉し、予測される危険に対して、自らの責任において処理するという条件の下、1940年1月26日に日本を立ち、同年3月1日にマルセイユ港に到着した⁹。当初は、イレーヌ・キュリーが副所長を務めるラジウム研究所に所属する予定だったが、戦時の規則変更で、外国人は所属できなくなっていた。イレーヌは、コレージュ・ド・フランスにいる夫フレデリック・ジョリオの研究室を紹介した。紆余曲折の果て、ジョリオの指導で博士論文を作成するという条件で湯浅の研究所入りが認められた。こうして湯浅は「ジョリオ先生」の弟子となったのである。

コレージュ・ド・フランス入所後しばらくは充実した研究生活が続いたが、ドイツ軍のフランス進攻のために、その年の5月にボルドーに避難してまたパリに帰るといった混乱した生活を強いられた¹⁰。それでも湯浅は、実験の名手ジョリオから、さまざまな技術を学んだ。パリでの努力の成果は、「人工放射性元素から放出されるβ線の連続スペクトルに関する研究」として実り、1943年12月6日にソルボンヌ大学で学位審査が行われた¹¹。

しかし現実のパリ生活は混乱を極めていた。しかも湯浅の立場は微妙だった。ドイツの占領下では、ある意味ドイツの「同盟国人」である日本人は安全だったが、フランスにとっては敵国人である。湯浅は悩んだが、それでもジョリオ研究室には外国人差別は存在しなかった。これは稀有な環境と言えよう。加えて、ここには女性差別も存在しなかった。ジョリオはマリー・キュリーの弟子であり、その娘イレーヌの夫、つまり、偉大な女性科学者を師であり妻としていた男性である。ジョリオ研究室は女性研究者にとって働きやすい場所だった¹²。これも当時のフランスでは例外的なことである。

多少わき道にそれるが、当時のフランス女性の状況を説明しておく。たとえば選挙権では、フランス女性がこれを獲得したのは、アメリカに遅れること25年、日本と同じ第二次世界大戦後だったことを見ても、フランスが特段に女性の権利の先進国ではなかったことがよくわかる。ところが、マリー・キュリーが所長だったころ(1914-1934)のラジウム研究所キュリー研究室には、常に女性研究者や女子学生が全研究者の三分の一程度所属していた。したがって、この環境で研究の基礎をキュリーに仕込まれたジョリオは、女性を自分の対等な

同僚とみなす習慣が若いころから身につけていたのである¹³。

こういう特殊な師をもったこともあり、日本における女性差別に関して、湯浅は戦後一貫してそれを批判し、フランスの状況を称え続けた。たとえば「フランスでは、男子でも女子でも自分の好きな道に進むのがあたりまえのことなのである」、あるいは「〔生物学者の保井コノ（1880-1971）は〕日本ではどれだけの高い犠牲が払われたことであろう。女性の活躍に対して、日本の男性はむしろこれを否定しようとするかに見える」といった描写は典型的である¹⁴。本当を言うと、ジェンダーに関しての湯浅のフランス像はかなり美化されている。一般には5月革命（1968）以前は、フランスでも大多数の研究室には大きな女性差別があった。そもそも、湯浅本人が先の文章のすぐあとに、そのフランスでキュリー夫人もジョリオ=キュリー夫人も、パリの科学アカデミーに拒絶された（夫のピエール・キュリーとフレデリック・ジョリオは受け入れられている）と書いている。これはあからさまな女性差別である¹⁵。

ともあれ、この戦争の時期に、科学のみならず、ジェンダー観においても稀有な師であるジョリオから学んだことは、湯浅のその後の人生の指針となる。「ジョリオ先生」は、あらゆる意味で湯浅の模範となったのである。しかしながら、ついに戦況は日本にもドイツにも不利になり、1944年7月に日本政府から、フランス在住の日本人に最終帰国命令が下る。湯浅は数ヶ月のベルリン滞在を経て、まずはシベリア鉄道経由で満州に行き、そこから船で昭和20年（1945）6月末に日本本土に戻った。ところが母は瀕死で、終戦の直前に亡くなってしまふ¹⁶。さらに広島と長崎に落とされた原子爆弾は、湯浅に激しい衝撃を与えた。この数日後、ついに日本は無条件降伏する。こうして湯浅の戦後がはじまったのである。

東京女高師のみならず、終戦直後の日本の科学界にとって、フランスやドイツで最先端の放射能研究を行っていた湯浅の存在は貴重だった。復帰した東京女高師や科学界、さらには教育界にとっても、湯浅はなくてはならない存在となる。このとき日本政府は、学校制度の大きな改革を準備しており、いまこそ女子教育を男子と同等に、と願う教育者たちが奔走していた。湯浅の生活は多忙を極める¹⁷。本稿で参照する『湯浅文書』はこの時期のものである。傍から見れば、湯浅は終戦直後の日本における知的世界のスターだったが、本人にとっては、当時の日本の状況はあらゆる面で耐えがたいものだった。そこにはまともな研究所も、女性科学者への尊敬もない。弟子の窮状を察したジョリオは、フランス行きの渡航費や滞在費を準備して彼女を誘い、湯浅は日本の大学に籍を残したまま、1949年に再渡仏する¹⁸。

その後、1955年にはお茶の水女子大学に辞任届を提出し¹⁹、フランスにとどまることを決意した。以後湯浅は、コレージュ・ド・フランスの研究員として

研究活動を行う。1957年にはCNRSの研究者となり、最後までそこで研究を続けた。湯浅は多分、男性を入れても、フランスで正規の職を得た最初の日本人科学者であろう。1972年には、オルセー原子核研究所（IPS）で主任研究員に任命された。ここで湯浅は、当時の原子核研究では最先端とみなされていた、巨大なサイクロトロンを必要とする、少数核子系の実験的研究を行った。

パリに骨を埋める決意をした湯浅であるが、歌人の末裔として日本の美意識を失うことはなかった。湯浅は科学論文だけでなく、科学や文化や政治などあらゆるテーマについてすぐれた随筆を書き残した²⁰。その姿はまさに無給の日仏文化大使であった。晩年の湯浅が最も力を入れた日仏交流は、フランスのCNRSと日本のJSPS（日本学術振興会）との間の日仏共同科学研究の実現である。癌の症状に苦しみながらも、死の二日前まで入院することを拒んだ。共同研究の合意についてのCNRSの返事が来たのは、死の床の1980年2月1日である²¹。

湯浅の葬儀はパリのペール・ラシェーズ墓地で行われ、遺灰の一部は同墓地の納骨堂に、残りは東京の湯浅家の墓所に埋葬された。「最後まで徹底的に（Jusqu'au bout）」は湯浅のモットーであり、この言葉通りに自分の生を貫いた。科学者湯浅年子は、日本人によって賞賛されているだけでなく、フランスでも高い評価を得ている²²。

4. 湯浅と終戦直後の日本(1)―欠乏の日々

キュリー・アーカイヴにある『湯浅文書』の最初の二つの手紙（付録1, 2参照。以下「Y.1,2」の様に記す）は湯浅のものではなく、彼女がパリで寄宿していた国際女子学生会館の館長、アメリカ人ワトソン（Sarah Pressly Watson, 1885-1959）がフレデリック・ジョリオ＝キュリーにあてた、1945年3月の手紙である。ここでワトソンは湯浅の無事を知らせ、ジョリオはその知らせに安堵したと返事をしている²³。

実は湯浅が1944年8月15日にパリを発った時、フレデリックはそこにはいなかった。彼はこの年、レジスタンスのリーダーの一人として、妻子をスイスに避難させたあと、6月26日に地下にもぐり、ほとんどの友人知人との連絡を絶っていたのである。つまり湯浅は敬愛する師に別れを告げることもできず、その生死もわからぬままに、パリを去らざるを得なかった。そのために何とかして自分の無事を知らせたいと思い、ドイツからワトソンに無事を知らせ、それでワトソンがそのことをジョリオに知らせたのである。

湯浅が自らジョリオに自分の消息を知らせたのは、多分 1946 年 10 月 8 日の手紙が最初であろう (Y. 3). 湯浅の日記をまとめた山崎は、このころの湯浅の苦悩について「もっぱら日記の中に封じ込まれていて、人々の中にあっては、悲しみはだれにも気づかれないように」²⁴していたと述べたが、じつはそうではなかった。湯浅は少なくともフランス側の人間には、自分の精神的・物理的窮状を訴えていたのである。

1946 年のこのとき、湯浅はどういう状況にあったのか (図 1). 公的には東京女高師の助教授に戻っていたが、研究者としては 1945 年の 8 月末から理化学研究所の所長であった仁科芳雄

(1890-1951) の許可を得て研究嘱託となり、理研のサイクロトロンで研究を行う予定だった。ところが 9 月 22 日に GHQ が日本の原子力研究を禁止し、11 月 25 日にはサイクロトロンを破棄してしまい、湯浅はお手上げになった。そのため、とりあえず B 崩壊の論文を書いているという状況だった²⁵。手紙にはこの事件のショックが綴られている。



図 1. 1946 年ころの湯浅
東京女高師物理実験室にて
お茶の水女子大学所蔵

今こうやって、先生にお手紙を書くことができるようになって本当にうれしいかぎりです。もう 2 年も先生にお目にかかっておりません。私はいつも、先生はどうしておられるだろうと思っていました。時々日本の雑誌に先生の名前を見つけると、とても幸せな気持ちになったものです。じっさい、先生のご指導の下に、先生の研究室にいるときにだけ、私の人生には意味があったのです。今の私の生活は、まったく生気のないものです。〔母親が亡くなったことと、東京大空襲についての記述〕私にはもはや、研究にしか希望を持ってません。それなのに、その唯一の望みさえも、物資の不足で思うように行きません。特に、このところ研究をしていた仁科先生の研究室にあったサイクロトロンを失ったことが大きいです。[...] こんなことはみんな戦争のせいだということは良く分かっています。でも、それでも、私たち日本人が、あの戦争を避けることができなかつたことをとても悔やんでいます。

軍国主義とは反対に、今の日本にはアメリカ式の自由主義がはびこっ

ています。そのことにも私は懸念を持っています。私は思うのです。今こそフランス文化を、キュリー夫人や先生のような方に代表されるその文化を日本に示すことが必要だと。(Y. 3)

このあと湯浅は、自分が今イレーヌにもらった『ピエール・キュリー』を和訳していること。キュリー夫人もジョリオ=キュリー夫妻も日本では非常に尊敬されていること。仁科芳雄もジョリオと知己になりたがっているといったことを述べ、最後に自分への手紙の書き方—東京女高師の寮の住所—を知らせている。

この手紙へのジョリオの返事が、よく湯浅が言及する「貴女 of 消息を知ってよろこんでいる。ふたたび仕事を始めよう。貴女がふたたび研究室に来て、研究されることを願う」という電報だと思われる²⁶。ともあれ、湯浅は1947年に新年の挨拶状で、ジョリオから便りが来たことに喜んでいる(Y. 5)。「先生からのお返事をいただいたことは、私にとって限りない喜びです。それは完全な廃墟の日本で、家も、両親も、そして何より実験室のない日本で、生き抜くための勇気を私に与えてくれます」と書き、そのあと、サイクロトロン破壊後の理研の様変わりを嘆き²⁷、日本ではまったく研究できないので「もう一度先生のところに戻って、あと何年か研究できれば、と思っています。そしてそのあと、日本の復興のために尽くしたいのです」としたためている。つまり当初湯浅は、フランスに骨を埋めることは考えていなかった。彼女はこの時点では、戦争のせいで中断した留学を完遂して、そのあとは母国のために生きようと考えていたのである。

たとえば、その次の手紙(Y. 11)でも、週に17時間も授業がある上に、理化学研究所では基礎研究ができないし、忙しすぎると嘆き、ひたすらパリからの手紙を待っていると書きながらも、自分の教育の目的は日本女性の状況を改善することだと書いている²⁸。3節でも述べたが、このとき政府は大規模な教育改革を準備しており、湯浅は女性科学者が自由に活躍できるような教育・研究環境を整えたいと奔走していたのである。しかしそこでぶつかるのは、日本における女性差別のあまりにも分厚い壁だった。湯浅はこのころ『科学への道』という著作の中で次のように述べている。

日本の女性が科学の道へ進むのを阻むものは何かということを考えてみたこともあった。[...] 日本に帰ってきて強く感じることは、日本の国民生活がいかに男子中心であるということである。そして女性の生活がいかに細かく男性が干渉するかということである。どこの国に行っても女性の服装結髪法にまで男性の干渉しているところはない。婦人はそのために自分自身の力で考えることすら忘れ去ってしまう。考える

力を持たない人々からなんで科学が生まれようか²⁹.

自分が再渡仏し、戦後のフランスの教育・研究事情に通じるのは、再び帰国したあかつきには日本で女性科学者を育成するためにも有用だと考えていたのかもしれない。しかし現実にはその日は来なかった。先に述べたように、湯浅はフランスに骨を埋めたのである。

これは後の事になるが、湯浅は1955年にお茶の水女子大学に退職届を出し、パリに留まる決心をした。彼女は公には、その理由をあまり明白にはしていない。しかし、それは戦後すぐのこの時点において、日本を脱出したかった二つの理由—日本における研究環境の不十分さと女性研究者への差別—が、1955年時点においても改善されていないと感じたためであることは、私信より明らかである。湯浅はこの二つの理由について、当時彼女を日本に呼び戻したかったお茶の水女子大学名誉教授の保井コノへ、ジョリオからの忠告という形で書き残している。

ジョリオ教授も、今帰っても日本の男性の考え方をすっかり変えさせることが出来るわけでないし、また研究に好条件になっているとも思えないから、こちらで一心に研究して、10年以内には帰るようにしたら、日本のためにもその方がよいと思う、と言われます³⁰。

湯浅に関する論文の中で、科学史研究者の伊藤憲二は、湯浅の再渡仏を、当時の日本における女性差別と安易に結びつけるべきでないと主張している。伊藤はその理由のひとつに、この時期の理化学研究所は、日本では珍しくジェンダー・バイアスの少ない研究所だったと述べ、むしろ仁科と湯浅の研究スタイルの違いからくる軋轢に注目している³¹。確かに湯浅と仁科の研究スタイルには両立しがたいものがあり、伊藤が理化学研究所のジェンダー状況について述べたことは正しいであろう。ただ問題は、こうした「客観的」判断では湯浅の気持ちは理解できないということである。湯浅は理研をどこと比較したのか。女性研究者の扱いに関して湯浅が比較しているのは、フランスの平均レベルの研究所ではなく、ジョリオの研究室や、実質イレーヌ・キュリーが率いていたラジウム研究所である。先にも述べたが、これらはジェンダー平等に関してはきわめて例外的な研究所であり、当時世界で一、二を争うレベルである。こんなところと比較されれば、「日本では良い方」の理研ではまったく太刀打ちできない。

ここで注目に値することは、保井コノへの手紙において、湯浅が日本のジェンダーの問題を、自分の意見としてではなく、ジョリオ（男性科学者）の意見

として語らせていることである。つまり、自己主張が激しいと言われた湯浅を持ってしても、しかも 1955 年になってもなお、日本ではこの主題を女性自らが自分の利益のために述べることは難しかったのである。

5. 湯浅と終戦直後の日本(2)―再渡仏への奮闘

再渡仏のために、湯浅は GHQ やフランスの関係機関とも接触している。さらに、フランスでの博士論文出版に助力してくれた、パリの国際学生都市の創始者でもあり、フランス政界の重鎮でもあったアンドレ・オノラ (André Honorat, 1868-1950) にも、かつてのフランス給費生として手紙を書いた。『湯浅文書』に保存されているのは、オノラが作ってジョリオにあてた写しである (Y. 7)³²。湯浅はそこでは自分の窮状をこのように訴えている。

私は 1945 年の 7 月、つまり終戦の直前に日本に戻りました。母はしばらく病んで亡くなりました。4 軒あった我が家もすべて空襲で焼失し、ひとりぼっちになってしまいました。家もなく、科学研究をする手立てもありません [...] 私は現在、若い人たちにフランス文化について話しており、彼らの多くは私の話に熱心に耳を傾けています。

私はこの〔文化交流的〕仕事に自分を捧げようと思っております。けれども、科学研究をあきらめたくはないのです。もしフランスで研究を継続できるなら存外の喜びです。

もし私のこの望みを外務省にお伝えくださればありがたいです。[...] アメリカ側は、私のフランス留学にはなんの問題もないと言っています。ただ、何らかの給費がないとそれ実現するのは不可能なのです。(Y. 7)

オノラは 1947 年 3 月 12 日にこの写しをジョリオに送り、湯浅をぜひ招聘したいので、外務省のマルクス (Marx) に手紙を書いてくれと頼んだ (Y. 9)。ジョリオはすぐさまマルクスに手紙を書いた (Y. 10)。ただしそこで、研究環境を整えるために、1 年は待つほうが良いだろうとも述べている。

湯浅は多分この「1 年待ち」の話は聞かされていなかったのであろう。この年の 8 月に、ジョリオに改めて自分の窮状を訴え、フランス行きの招聘状が欲しいと書いた (Y. 14)。そこでは、日本には電気もガスも水も足りなくて研究できないので「もしフランス行きの正式な招聘状を下さるなら、すぐにでもフランスに飛んで行きたい」と述べている。たとえ物価が高くても「先生のところ研究できるなら、どんな苦勞も厭いません。ですから、私に、先生のおそばで研究できる喜びをもう一度与えてください」と訴えた。この手紙には、自分と

東京女高師の学生の写真も同封している。これに対するジョリオの返事（11月5日付）は、キュリー・アーカイヴとお茶の水女子大学図書館の両方に残っている（Y. 15）³³。彼はこのときフランス原子力庁長官だったので、この機関の便箋を使用している。

貴女の手紙を受け取って大変うれしく思います。また、貴女が私に示してくれる変わらぬ友情と信頼にも大変深く感動しています。

コレージュ・ド・フランスの研究所で、再び貴女と一緒に研究できるならとてもうれしいことです。[...] [再留学のためには] CNRS に 1948-49 年度の給費の要求をしなければなりません。 [...]

ジョリオ夫人は、貴女がキュリー夫人の『ピエール・キュリー』を翻訳してくれたことにとても感動しています。 [...]

母上のご逝去に対してお悔やみを申し上げます。私も 1946 年に母を亡くし、悲しい思いをしました。

何度でも言いますが、貴女がふたたびパリに来て私の研究所で働くことができるようになるなら、それは私には大変うれしいことです。（Y. 15）

そして湯浅が同封した女子学生との写真の札をいい、湯浅から託された論文をなんとかして *Journal de physique* で出版できるようにしたいと述べている。

しかし再留学への道筋は簡単ではなかった。湯浅は焦燥し、理由は述べられていないが、なぜかラブティ夫人（Mme Raptis）という人物にジョリオあての手紙を託した。湯浅の日付は 1948 年 7 月 26 日（Y. 18）で、ラブティがそれをジョリオに宛てたのは 9 月 21 日（Y. 19）である。湯浅は CNRS が給費をくれるのか、本当に今年中にフランスに行けるのかどうか非常に心配しており、奨学金がとれないなら自費ででも行きたいと訴えている。

ここで驚くのは、ラブティからジョリオあての手紙が 21 日付なのに、彼は同日 CNRS のテシエ（Georges Teissier, 1900-1972）にこのことで手紙を書き、湯浅への奨学金を頼んでいることである。この手紙はかなり長い。湯浅がドイツ占領中に自分の下で博士論文を仕上げた留学生であったことを説明した後、彼女の能力や人柄を絶賛している。

私はこのすばらしい科学者の仕事にきわめて満足しています。しかも彼女はすぐれた倫理観の持ち主です。とりわけ、彼女はそれを、あの占領の厳しい時期に示して見せたのです。ジョリオ=キュリー夫人も、私の研究室のすべてのスタッフも、この点では意見が一致しています。湯浅氏はフランスに理解のある、進取の気質のある人物であり、わが国に

において、注目に値する仕事を成し遂げえるでしょう。[...] /湯浅氏にここで研究する機会を与えるならば、このランクの科学者にふさわしい超一級の仕事で、フランスの科学研究に大いに貢献することができます。また他方において、彼女がわが国に対して抱いている情熱や深い理解によっても、わが国に大いなる貢献することが可能なのです。(Y. 20)

湯浅の方もこの秋には立て続けにジョリオあての手紙を書いており、CNRSの対応を気にかけていた。ここで興味深いのは、後でも述べるが、このとき湯浅がフランスと同時にアメリカへの留学も視野に入れていたことである。9月21日付のジョリオ宛の手紙(Y. 22)では、シカゴ大学原子核研究所から招聘されているが、本当に行きたいのはフランスだと書いている。それにつづけて「私は学校でも研究所でも大学でも³⁴、数え切れないくらい先生の話をしています。それでみんな、学者として、あるいは教師としての先生の態度に感銘を受けています」と述べている。

じつは湯浅のこの手紙をジョリオが受け取ったときには、奨学金については片がついていた。テシエは研究員として湯浅に給費を出そうと請け負ったのである(Y. 23)。湯浅はCNRSからの承諾の返事を聞いて狂喜する(Y. 24)。この手紙には、もう一度フランスに行けるといふ湯浅の喜びがあふれている。

[CNRSの承諾の知らせが] どれほどうれしかったか、言葉では言い表せません。

これはひとえに先生のおかげです。私はうれしくて頭がおかしくなりそうで、この知らせを受け取った日から、食事ものどを通りません。

先生の下で一日中研究できるなんて。こんな幸せなことがあっていいものではないでしょうか。

もうすぐ先生の下に行けるのです。ああ、私がどんなにわくわくしていることか。(Y. 24)

ただ、これは給費、つまり滞在費が出るというだけである。旅費の問題が残っていた。ジョリオは、今度は旅費の捻出に奔走する。何度もCNRSと交渉するが、良い返事はもらえなかった(Y. 26, 27, 28)。

『湯浅文書』には、旅費が下りたというフランス側の手紙は残っていない。しかし最終的に問題は解決したと見えて、翌年、つまり1949年1月のジョリオへの手紙(Y. 29)で、すべてうまく行ったら、この月の終わりには日本を發つて、3月にはパリに着けるだろうと述べている³⁵。これは新年の挨拶状でもあり、彼女が前の年の暮れあたりに受け取ったジョリオ＝キュリー夫妻の娘、エレー

ヌ・ジョリオと、ジョリオの師でピエール・キュリーの教え子でもあったポール・ランジュヴァン (Paul Langevin, 1872-1946) の孫ミシェル・ランジュヴァン (Michel Langevin) との結婚の知らせに対するお祝いの手紙でもある。

お茶の水女子大学の湯浅アーカイブに、湯浅が受け取ったこの二人の正式な結婚通知が残っている³⁶。それを見ると、二人は1948年11月4日に結婚したとある。当時の結婚通知は双方の親が出す形のもので、カップルの両親の職業がわかる。ノーベル賞科学者である花嫁の両親は、コレージュ・ド・フランスとソルボンヌ大学の教授だが、花婿の両親もやはり教員で、父親(ポール・ランジュヴァンの息子)はパリ市立物理化学学校(ピエール・キュリーの職場で

あり、彼の後任がポール・ランジュヴァンだった学校)の教員、母親はリセ・フェヌロンという名門高校の教員である。カップルの資格は、二人とも

E.P.C.I.取得のエンジニアであると書かれている³⁷。湯浅はこの結婚を「科学的結婚と称え、「四つ目あるいは五つ目のノーベル賞が、ご家族にもたらされますように」と祝している。

いまだCNRSの返事にはあいまいな部分もあったが、ともかくも再渡仏の準備はととのったのである。



図2. 1948年12月21日 湯浅の送別会
東京女高師の物理の学生と共に
(湯浅は前列左から3番目)

6. 科学者湯浅年子への評価

ここで少し『湯浅文書』を別の側面から考えてみよう。文書を読んで気がつくのは、湯浅が自分のことだけではなく、他の日本人研究者の渡仏についても、フランス側に助力を仰いでいることである。湯浅のめんどろみの良さは有名で、ここからもその一端が伺われる。特にこの時期は日本人全体にとって厳しい時期であり、研究者たちはまともに研究ができず、みな文化に飢えていた。湯浅自身も飢えていたが、「フランス帰りの」最先端の研究所生活を経験していた湯浅は、大多数の日本人研究者にとって、自分たちの知的な飢えを満たしてく

れる大切な存在だった。戦後のこの時期、東京女高師の湯浅研究室は、一種の知的サロンになっていたと、繰り返し山崎が書き残している³⁸。したがって、『湯浅文書』で推薦されている日本人研究者は科学者だけではない。ここでは物理学者田島英三（1913-1998）のほかに、後に比較文学の大家となる福田陸太郎（1916-2006）の名前も出てくる³⁹。福田はなんと湯浅の履歴書のなかで、仁科やジョリオともども、家族以外の身元保証人の一人に名前を挙げられている（Y. 12, 13）。

ここで興味深いのは、ジョリオがこうした湯浅の世話焼きにクギをさしていることである。彼は湯浅自身に「あなたのお仲間たちのことも〔当局に〕話そう。しかし、あなた自身が満足を得ることが先決だ」（Y. 14）とたしなめている。

じっさい、明治生まれの日本人の謙譲の美德、というものを考慮しても、総じて湯浅には自分を卑下する傾向がある。それは科学の才能についてであったり、教師としての能力であったり、外見についてであったりする。湯浅は随筆や日記にたびたび、自分には「科学的才能が乏しい」「教員に向いていない」「美人でない」などと書き残している⁴⁰。もしかしたらこうした意識が、まるで自分と他の（ジョリオの知らない）研究者たちを同等に扱う、あるいは優先しているかのように見える文章を書く結果となり、師にたしなめられる事態になったのかもしれない。

事実は、湯浅は無能どころではなかった。たとえば田島英三は、このころの湯浅を以下のように賞賛している。山崎の言うところの、知的サロンの中心人物であった湯浅の姿を髣髴とする記録である。

話は終戦前の 1943 年〔田島の記憶違い。本当は 1945 年の夏〕の暮れに戻るが、湯浅年子さんが留学席のフランスから 4 年ぶりに帰ってきた。彼女は私にとって東京文理科大学の三年先輩で〔…〕原子核の研究をしていた。

〔帰国のためのシベリア鉄道の中で〕携帯品はリュックサック一個だけが許され、その中にはひとつの実験装置が入っていた。〔…〕あの厳しい状況の中で実験装置を何よりも大切なものとして、はるばる持ち帰った彼女の心根に私は頭が下がった。〔…〕

8 月 15 日の終戦の日が来た。街は急に明るくなって、二人の話題はこれからの日本の学問の動向等が中心になった。しかし当分は生活をするのが精一杯で、学問する余裕などは出て来ないだろう。それに仁科研究室にとって、サイクロトロン撤去は致命的な打撃である。そこで彼女は私に、アメリカの大学に行って研究を続けるよう強く勧めた。その方法として業績表を添えた留学希望の手紙を書き、アメリカの大きな大

学に郵送することを教えてくれた。彼女の言うには、アメリカではこの戦争で優秀な人材が不足して困っているというのである。私は考えも及ばぬ奇想天外の方法だと思ったが、長いこと外国の空気を吸ってこられた先輩の教えに従うことにした。私は彼女に言われたとおりの手紙を作って、アメリカの十の大学に郵送した。湯浅さん自身も同じように書類を作成して、アメリカの大学に送った。あわよくば同じ大学で一緒に学問しよう、などと話し合った。

[...]

1948年の暮れ、シカゴのL.H.アンダーソン教授から、シカゴ大学原子核研究所（現在のフェルミ原子核研究所）に研究員として招聘するから至急来られたし、という手紙を受け取り吃驚した⁴¹

田島が見た湯浅は、敗戦で打ちひしがれているどころか、バイタリティあふれる前向きな人間である。田島はそんな湯浅に感銘を受け、おかげでアメリカ留学のチャンスをつかんだのである。ここで田島が作ったという履歴書の一部が、付録6番(Y.6)の、ジョリオに送った手紙に添えた田島の履歴書であろう。つまり、これが英語である理由は、基本的にアメリカ向けのものだったからである⁴²。また、湯浅自身の履歴書(Y.12,13)についても、英仏両方あるのは、どちらに留学できるかわからなかったので、二種類作成したのでであろう。つまり湯浅は、なにがなんでも日本から脱出したかったのである。

ジョリオは、こんな科学者湯浅年子をどう思っていたのか。『湯浅文書』にあるジョリオの手紙の中で、湯浅の特徴について目立つ表現は「*travailleuse*, 働き者」である。ジョリオはこの言葉を強調し(Y.2, 10, 25)そんな湯浅を支援してくれと、各方面に嘆願している。性格面では「*qualité morale très élevée*」という表現で、彼女の高い倫理性を称えている(Y. 2, 25)。それだけでなはない。「*excellente scientifique*, すばらしい科学者」「*premier ordre* 一級の」研究といった表現も使用し(Y. 25), 湯浅のフランス文化への深い理解への感動とも相まって、湯浅に対するジョリオの評価は高い。

そもそも湯浅は、日本人で最初にフランスに正規の職を得た科学者である。これはジョリオのコネだけでできることではない。湯浅の努力と才能の賜である。しかも、湯浅の文章にも繰り返されているが、ジョリオは地道な努力と正確な実験結果を何よりも優先した人物である。彼の口癖は「世の中に天才と言うものはないと思う。ただどこまで努力するかがあるだけだ」「一時的に仕事に頑張り、あとは遊んでいるという人より、私はたえずたゆまず努力する人の方を信用する」「よき実験家になるためには、まず、よき職工にならなければならない」というようなものだった⁴³。したがって、ジョリオにとってはもしかした

ら、brillante より、travailleuse の方が、科学者として価値のある素質だと考えていたのかもしれない。

では教師としてはどうだったのか。湯浅の自己認識の中で、これこそが完全に誤った判断である。特に晩年から死後にかけて、湯浅の後輩、教え子たちがどれほど湯浅のために時間やお金を割いて、シンポジウムを催し、文集などを編集したか、そしてそこに湯浅への心からの賞賛を書き残したかを見ると、彼女が教師としていかに慕われていたかがよくわかる⁴⁴。それはあたかも、フレデリック・ジョリオに対して、湯浅が書き残した文章を思わせるものである。湯浅は多分「ジョリオ先生」と自分を比較して卑下していたのであろうが、私はこの点で二人は決して引けをとらないものと考え。もしも二人に差が出るとすれば、それはフランス文化とジェンダーに起因するものであろう。たとえば、ジョリオの人当たりの柔らかさは、多分にフランス文化が男性に要求しているものであり、日本人女性の湯浅が真似できるものではない。

さらに、湯浅は女性であるために、日本では特に、また本人がなんと言おうとも、フランスでも性差別を受けたはずである。男であるジョリオにはこんな経験はない。そもそも、ジョリオ=キュリー夫妻について「気さくで面倒見のいいできた夫と、頭脳明晰だが無愛想な妻」という対比が常になされていたのだ⁴⁵。有名人の両親を持ち、早熟な女性科学者だったイレヌ・キュリーは、常に世間の嫉妬と羨望の的だった。しかも、フランスを代表する美女と称えられた妹を持つ、普通の外見の女性だった。この環境のせいでイレヌの態度は非常に防衛的となり、初対面では湯浅すらその「冷たさ」に動揺した。それでも最終的に、湯浅はイレヌの「優しさ」を発見し、彼女を女性科学者のロールモデルとして大いに称えている⁴⁶。だとすれば、こうした社会構造の中で、湯浅が「ジョリオ先生」になるのは所詮無理であり、それは「神になれない」と嘆くようなものである。実際の「湯浅先生」は学生にとっては良き教育者だったのだ。

繰り返しになるが、確かなことは、当時の日本にはこの稀有な女性科学者の才能を活かせる環境がなかったことであり、それを成し遂げたのはジョリオとその背後にあるフランス文化であったということである⁴⁷。

7. ふたたびフランスへ！

前々節で見てきたように、CNRS の許可を得て、湯浅は、今度は横浜の港から、1949年2月21日に貨客船で日本を発った⁴⁸。

湯浅は船中からもジョリオに手紙を書いている。最初の手紙の日付が2月22日(Y. 30)なので、湯浅は乗船後すぐに師に手紙をしたためたと言っている。

冒頭に書いた「神にも等しい」先生という表現が出てくるのはこの手紙である。希望は確かにあった。長い間待ち望んだ出発のはずだった。しかし、日本に残してきたさまざまなものに対する想いが交錯し、湯浅はかなりの精神不安定に陥っていた。

しかもシンガポールで思いも寄らない事態に出くわす。ここでフランス行きの船に乗り換えるはずだったのだが、なんとマルセイユの船会社のストで、待てど暮らせどその船がこないのである。湯浅はシンガポールに長期間留め置かれた。外貨の持ち出しも制限された中でこの滞在は、思わぬ出費を強いられることになり、手持ちの資金が底を尽きそうになる。家まで売ってこの船に乗ったものの、このままではもう一度日本に帰って最初からやりなおさなければならないとまで嘆く事態に陥り (Y. 33), 湯浅は恥を忍んで資金援助を師に請い、なんとかパリに行きたいと訴えた。

この船が 3 月 30 日にシンガポールを発つ前に、先生のアドヴァイスをいただけたら本当にありがたいです。そうすれば、すっかり枯れてしまった勇気を、もういちど振り絞ることができそうです (Y. 33)

シンガポールの事件を知ったジョリオは、CNRS のテシエとのすばやいやり取りの末 (Y. 33,34,35), 船など待つなど言っ、航空券の手配までしてくれたのである⁴⁹。このあたりの配慮の細やかさは、湯浅が到着してから彼女が目撃した「ジョリオ先生」の忙しさを考えると驚くべきことで、ここからも、湯浅が師に深い感謝を持ち続けたのは当然と言えよう⁵⁰。最終的に、飛行機より先にフランスに行く便が来ることになり、湯浅の最後の手紙には、安堵の様子がありありと表れている (Y. 36)。

シンガポールから出した〔錯乱した〕手紙のことは本当にお許しください。あのときは本当にどうしていいかわからなかったのです。

最後の最後の瞬間に、4 月 2 日に発つこのフランス船に乗らないかと言われたのです。

〔ジョリオが用意した飛行機に乗るより、この船の方が、都合が良かったことの説明〕

4 月の末にはパリに着けると思います。昔のように、また先生のおそばで仕事ができると思うと、じっとしてられないほど嬉しい気分です。

船の中で、理論的なことを少しばかり勉強しています。というのも、ここに来るまで、まともに仕事ができる時間などあまりなかったからです。そういうわけで、この無益に過ごした年月の後に、先生にお目にか

かるということには、かなり怖いものがあるということも事実なのです。
(Y. 36)

こうして紆余曲折の果て、湯浅ガル・アール・ブルの港に着いたのは1949年5月5日。翌日パリに到着し、5月7日、ついに再び「ジョリオ先生の」研究所にいる自分を見いだしたのである⁵¹。こうして日本の終戦直後を描写した『湯浅文書』は終了する。

8. おわりに—湯浅研究の未来

さて、こうしてパリの『湯浅文書』をたよりに、帰国から再渡仏までの湯浅の歩みを追ってきた。ここから見えてくることは何であろうか。それは湯浅をはじめ、終戦直後の混乱の中で、それでも研究を続けようとした多くの真摯な日本人科学者たちがいたということである。同時に、困難な郵便および交通事情の中で、それを助けようとした戦勝国の知識人が確かに存在したということでもある。フレデリック・ジョリオをはじめ、その妻イレーヌ・キュリー、パリ国際学園都市のオノラ、国際女子学生会館のワトソン、CNRSのテシエ、シカゴ大学のアンダーソン (H. L. Anderson, 1914-1988)。彼らは、かつての敵国であった日本の科学者たちの才能をつぶさないようにと、精神面でも資金面でも多くの手をさしのべた。

湯浅は再渡仏後に、フレデリック・ジョリオが自分の誕生日の祝いの席で「研究を落ちついてするためには、内外に憂いがあってはできません。戦いのない国で、家族の生活に不安がなく、しかも家族の深い理解を得てはじめてできるものです」と述べたと書き残している⁵²。じつはこの説とは反対に、科学技術が戦時に飛躍的に発展するのは周知の事実である。しかしそうした代表例であるマンハッタン計画が、私たち日本人に何をもたらしたのかを考えて欲しい。

願い続けたふたたびのパリで、湯浅は戦争のせいで変わり果てたかつての同僚や、思うように研究を進められない自分自身を省みて「今次の大戦が、いかに多くの才能ののぼるべき運命を滅ぼし去ったか」と嘆いた⁵³。これは決して卑下でもなんでもなく、湯浅の率直な感想であり、まぎれもない事実である。湯浅は師の思い出を綴った文章の中で、荒廃した故郷を見たときの感想を次のように述べている。

私は〔1945年7月〕、夕暮れの上野駅に降り立って、見渡す限り焼け野原となった東京の姿を見た時ほど、身をもって悲しく、哀れを感じたことはなかった。

まことそれは悪夢をみているような、否、むしろ自ら地獄へ来たような感じであった。「戦争を再び祖国にあらしむるな」ということを衷心希ったことを覚えている。これはもはや抽象論でなくて、肉体的な拒否であり、この時の感じに比べると、すべてそれまでの経験は真の意味で実感ではなかったのだ。私はこの点、あの敗戦を目の当たりにした世代の生きてある限り、日本は戦争を拒否するであろうと確信するが、それにつづく世代が再びこのようなことを繰返さぬように、教育し導くことは、私たちにとっていかなる理由のもとにも怠るべきでない義務であると思う⁵⁴。

私たちは、湯浅やジョリオが平和にかけた強い願い、後世に託した想いを忘れてはならない。1946年から49年に、湯浅とフランス側が交わした手紙には、そうした平和への熱い願いがこめられている。私たちは、いまこそ彼らの声に耳を傾けるときではないのだろうか。

最後に、日本とパリに存在することが明らかであるにもかかわらず、研究者の閲覧がかなわない史料について、これがいつの日が公開され、われわれがこの稀有な日本女性科学者の実像に、より近づくことのできる日が来ることを願ってやまない。

謝辞：キュリー博物館およびお茶の水女子大学附属図書館の学芸員の皆さん、特にナタリー・ピジャール＝ミコー (Natalie Pigead-Micault) 氏とアナイス・マシオ (Anaïs Massiot) 氏のご厚意に深く感謝する。お二人の協力がなければ、『湯浅文書』にめぐり合うことはかなわなかった。

付録：「フランス国立図書館所属、キュリー博物館所蔵、ジョリオ＝キュリー・アーカイヴ、F-68、『湯浅文書』リスト」(Bibliothèque Nationale de France / Musée Curie, NAF 28161. Archives Joliot-Curie, N.68)

注) 言語を記していないものはすべてフランス語。また、これは国立図書館が決めた文書の順番であり、必ずしも時系列に沿っているわけではない。通し番号は私が文書整理のためにつけたもので、実際の文書に通し番号が振ってあるわけではない。

1. 1945年3月24日：ワトソンからフレデリック・ジョリオ＝キュリー（以下、F.ジョリオ）への手紙
2. 1945年4月12日：F.ジョリオからワトソンへの返事（写し）

3. 1946年10月8日：湯浅から F.ジョリオへの手紙（多分これが戦後に出した湯浅からジョリオへの最初の手紙）
4. 1946年10月10日：Hiroshi TAKAWA（湯浅の最初のパリ滞在当時のフランス領事）からジョリオ=キュリー夫妻への手紙
5. 1947年1月9日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
6. 田島英三の履歴書（英語）
7. 日付なしの、湯浅からオノラへの手紙のオノラによる要約
8. 福田陸太郎の履歴書
9. 1947年3月12日：オノラ（パリ国際大学都市創立者）から F.ジョリオへの手紙. 6, 7を同封
10. 1947年3月19日：F.ジョリオからオノラへの返事（写し）
11. 1947年3月2日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
12. 湯浅の履歴書（英語）
13. 湯浅の履歴書（11のフランス語訳）
14. 1947年8月16日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
15. 1947年11月5日：F.ジョリオから湯浅への手紙（写し）
16. 1947年12月1日：イレヌ・ジョリオ=キュリー（以下、I.キュリー）から湯浅への、マリー・キュリー著『ピエール・キュリー伝』の翻訳許可（写し）
17. 1948年7月15日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
18. 1948年7月26日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
19. 1948年9月21日：ラブティ夫人から F.ジョリオへの手紙. 17が同封されている
20. 1948年9月21日：F.ジョリオからテシエ（CNRSのトップ）への手紙（写し）
21. 1948年9月23日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
22. 1948年9月21日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
23. 1948年9月25日：テシエから F.ジョリオへの返事
24. 1948年10月18日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
25. 1948年12月7日：F.ジョリオからテシエへの手紙（写し）
26. 1948年12月7日：F.ジョリオからジョクス（Joxe, 文化担当のトップ）への手紙（写し）
27. 1948年12月14日：バイヨー（J. Baillou, ジョクスが不在なのでその代理）から F.ジョリオへの返事
28. 1948年12月31日：テシエから F.ジョリオへの返事
29. 1949年1月13日：湯浅から F.ジョリオへの手紙

30. 1949年2月22日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
31. 日付なし：F.ジョリオから湯浅への電報（写し）
32. 1949年3月20日：湯浅から F.ジョリオへの手紙
33. 1949年3月29日：F.ジョリオからテシエへの手紙（写し）
34. 1949年4月6日：テシエから F.ジョリオへの手紙
35. 1949年4月11日：F.ジョリオからテシエへの手紙（写し）
36. 1949年4月13日：湯浅から F.ジョリオへの手紙

付記：本研究は「初期放射線科学と女性—マリー・キュリーの後継者たち」（科学研究費補助金・基盤(C), 15K01914）の助成を受けた研究である。

¹ 『湯浅文書』（付録参照）30（Y. 30）。

² 『湯浅年子資料目録』（お茶の水女子大学女性文化研究センター，平成5年）：『湯浅年子資料目録 続』（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター，平成10年）：『湯浅年子公開資料目録』（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター，2009）。特に『続』にある，松田久子「『湯浅資料目録』をまとめるに当たって」（『続』，pp.4-5）に，この間の整理作業の仔細が記されている。

³ 筆者がこの存在を知ったのは，友人でフランス化学史クラブの前会長ダニエル・フォーク氏の勤務先がたまたまオルセーの CNRS（CNRS は全国組織で，オルセーにある研究所群はその一部門である）であり，その関係でこの事実を知ったからである。

⁴ 湯浅年子『パリ随想』（みすず書房，1973）：『続・パリ随想』（みすず書房，1977）：『パリ随想 3』（みすず書房，1980）；湯浅年子，山崎美和恵編『湯浅年子 パリに生きて』（以後『日記』と記す）（みすず書房，1995）。

⁵ たとえば女性博士号第一号の生物学者保井ユノや，東北帝国大学最初の女子学生であり，女性博士号第二号の生物学者黒田チカ（1884-1968）をはじめとして，理数系の博士号を取得して科学者になった女性はずでに複数存在していた。ちなみにこの二人は共に東京女子高等師範理科出身で，湯浅の先輩に当たる。

⁶ 特に年子の高祖父橋守部（1781 - 1844）は，本居宣長と並び証された国学者であり，江戸時代の四大歌人の一人とまで言われた。『パリ随想』，note 4, pp.299-300；山崎美和恵編「湯浅家・橋家系図」『物理学者 湯浅年子の肖像』（以後『肖像』と記す）（梧桐書院，2009）最後のページであるがページ数がない。

⁷ もし湯浅がもっと早く，つまり女子のための高等教育機関が存在していない時期に生まれていたら，科学を学ぶことはできなかつたろう。これは湯浅が心の師として仰いだマリー・キュリーのケースに類似している。マリーはまさに，フランスの女子高等教育のはしりの時期に大学生となったのである。こうした制度的基盤がなければ，科学者キュリー夫人も湯浅年子も生まれることはなかつたのである。

⁸ これは多分イレヌとフレデリックによる以下の論文だと思われる。Irène Curie & Frédéric Joliot, “Un nouveau type de radioactivité,” *Comptes rendus de l'Académie des sciences*, 198 (1934): 254-6 in Kenji Ito, “Gender and Physics in Early 20th Century Japan: Yuasa Toshiko's Case,” *Historia Scientiarum*, 14(2), (2004): 118-136, p. 124. パリ渡航までの湯浅の足跡については，湯浅が自分で書いた『パリ随想』の長いあとがきももっとも詳しい。「あとがき」『パリ随想』，note 4, pp.297-324.

⁹ パリ渡航の事情や日時などに関しては，注4にある湯浅のエッセイや『日記』によった。

また、パリのキュリー博物館には湯浅自身による、タイトルのない短い英語の自伝のようなものが残されており、基本的に『パリ随想』の「ジョリオ・キュリー教授の思い出」にある「1. 初のパリ留学から引き上げまで」の一部分 (pp. 197-218) と同様の内容が書かれている。Archives du Musée Curie, Dossier T. Yuasa, chemise “Ecrits on-scientifiques,” pages photocopiées d’un cahier manuscrit (trad. du livre de souvenirs de Yuasa, *Trace d’éternité*, 1965).

¹⁰ 『パリ随想』, note 4, p.204.

¹¹ 湯浅年子の国家博士論文「人工放射性元素から放出されたβ線連続スペクトルの研究」(1943)はふたつの論文から構成されている。主論文は1944年にパリで出版された。Tosiko Yuasa, *Contribution à l’étude du spectre continu des rayons β - émis par les corps radioactifs artificiels*, thèse soutenue en vue de l’obtention du doctorat es sciences physiques (Paris : Gauthier-Villars, 1944). 湯浅はこのころ、自分の名前のつづりをTosikoとしている。二番目の論文「ウィルソン霧箱で観察された長い飛跡をもつβ線の異常衝突現象 (Chocs anormaux des rayons β le long de leurs trajectoires observés dans la chambre de Wilson)」は1946年の物理学会の年会で報告され、その論文集である *Proceedings of the Physical Society of Japan*, 1, Suppl. No.1 (1946): 18 に掲載された。湯浅年子「稀少現象を探って来た道を振り返って」『日本物理学会誌』34-4 (1979): 273-272, p. 273. この博士論文の審査委員は、主査はソルボンヌ大学物理学講座講師のジャン・シャバンヌ (Jean Chabanne). 副査はやはりソルボンヌ大学一般物理学および放射能講座講師のイレヌ・ジョリオ＝キュリー、ルーカス (M. Lucas) の3人である。湯浅史料を整理した松田は、この論文がエクセレンスと評価されたと述べている。松田久子「残された資料に見る湯浅年子」『肖像』, note 6, p. 395. またジョリオも湯浅に「思っていたより成功でした。あの決定 [excellence という評価のことか?] がこれからの経歴に重大な意義をもつものだから」と告げている。『パリ随想』, note 4, p. 137. ただし、賞状そのものに評価が記されているわけではない。

¹² 湯浅自身も、ジョリオの周囲にいた知的な女性たちが彼に及ぼした男女平等思想の影響とその特殊性について語っている。『パリ随想』, note 4, pp.216-217.

¹³ キュリー研究室の女性研究者については以下の文献を参照。Soraya Boudia, “Marie Curie and women in science,” *Chemistry Intern.*, 33(1) (2011): 12-15; Natalie Pigéard-Micault, “The Curie’s Lab and its Women (1906-1934), Le laboratoire Curie et ses Femmes (1906-1934),” *Annales of Science* (2012) : 1-30 : *idem.*, *Les femmes du laboratoire de Marie Curie* (Paris : Glyphe, 2013).

¹⁴ 『パリ随想』, note 4, pp.79-80.

¹⁵ 湯浅の教え子で、この問題について鋭い批判をしている女性科学者がいる。「私はしかし、このこと〔フランスの女性観は日本よりはるかに進んでいるという湯浅の意見〕は一応正しいとは認めるものの、〔湯浅〕先生がさりげなくおっしゃるほどに簡単なことではないと考えます。たてまえとしては、科学の道には国境もなければ性による区別もないはずですが、現実にはいずれの国においても、国境による差別も性による差別も厳然としてあることは、留学した経験のある人ならば誰しも認めるところであります。」(神谷美子「恩師 湯浅年子先生」『肖像』, note 6: 369-377, p.374.) 客観的に見れば、この教え子の言い分の方が、当時のヨーロッパにおける女性科学者の状態を正しく表現している。フランスで女性の社会進出が本格的にはじまるのは、やはり1968年の5月革命以降である。

これはかつてキュリー博物館の主任学芸員ピジャール＝ミコー氏が筆者に話してくれたことだが、カトリックの伝統の強いフランスでは、長らく「女性＝母」であり、結婚して母にならない女性は、(修道女でないかぎり) 神の意思に反する存在と見なされていたそうである。これは、女性に出産を強制する理由が、「家の存続」という実利的側面が強い日本とは事情が異なっている。「全知全能の神の命令」と「お家の大事」では、やはり前者のプ

レッシュャーの方が大きいというのが筆者の見解である（後者には養子という手がある）。湯浅の世代の多くのフランス女性は、こうしたプレッシャーの中にあっただけであり、そう考えると、湯浅はやはり女性研究者にとって特別に恵まれた環境にいたと言っていい。

16 湯浅の母親は、終戦直前の 1945 年 7 月 23 日に亡くなった。娘の科学研究を応援していた父親は、湯浅のパリ滞在中の 1941 年 1 月に亡くなっている。湯浅が父の死をイレヌ・ジョリオ＝キュリーに告げた時、やはり父を失った時のことを思い出したイレヌは、母マリーが書いた父の伝記『ピエール・キュリー』を湯浅に贈った。湯浅は戦後この本を訳して日本で出版した。マリー・キュリー『ピエール・キュリー傳』（湯浅年子訳、潮流社、1948）：Marie Curie, *Pierre Curie* (Paris: Payot, 1924). 湯浅はこのほかに、師であるフレデリック・ジョリオ＝キュリーの伝記や論文集も和訳して出版している。フレデリック・ジョリオ＝キュリー『ジョリオ＝キュリー遺稿集』（湯浅年子訳、法政大学出版局、1961）：Frédéric Joliot-Curie, *Textes choisis de Frédéric Joliot-Curie* (Paris : Editions sociales, 1959); ピエール・ビカール『F・ジョリオ＝キュリー』（湯浅年子訳、河出書房新社、1970）：Pierre Biquard, *Frédéric Joliot-Curie et l'énergie atomique* (Paris : Pierre Seghers, 1961) (reéd. Paris : Harmattan, 2003).

17 山崎美和恵『パリに生きた科学者 湯浅年子』（以後『伝記』と記す）（岩波書店、2002），pp. 96-100：『日記』，note 4, pp.146-147；『続・パリ随想』，note 4, p.105.

18 注 26 に仔細を紹介してあるが、一人悩んでいた湯浅への「ふたたび研究を始めましょう」というジョリオからの電報の一言は、湯浅を深く感動させた。私が 2010 年に湯浅の教え子の一人から受け取った手紙によると、湯浅はこのときフランス語がわからない学生たちに向かって、「ジョリオ先生がこんな電報をくれたのよ！」と言いながら、その文面をフランス語のまま大きく黒板に書いたそうである。

19 東京女高師は 1952 年に廃止され、お茶の水女子大学となった。

20 湯浅の随筆としては注 4 にある『パリ随想』三連作がもっとも有名である。

21 これを湯浅に伝えた物理学者の坂井光夫は、その時のことを「〔湯浅〕先生はもう意識がないという。私たちは病室に飛び込んだ。湯浅先生は病室の中央にある大きな白いベッドに白い衣を着て、ちょうど私が夢で見た姿とまったく同じ様子で小さく横たわっておられた。〔…〕『湯浅さん、坂井ですよ！』」というと奇跡のように目に生気がさして、意識が回復されたのである。〔…〕『先生、CNRS から OK の返事が来ましたよ』という、またうなずかれた。そして目に涙をにじませられた。何かおっしゃりたいらしく、口を動かされるのだが、聞き取ることができず、ただただ残念で『しっかりしてください』というのみであった。」と描写している。坂井光夫「鎮魂 湯浅年子先生—パリに死す—」『肖像』，note 6：308-306, p.309.

22 たとえば湯浅の死後、日本では彼女の栄誉を称える行事が何度も行われた。2008 年にはかつての職場であるパリの CNRS でも「湯浅年子記念の会」が開催され、11 月 24 日のその日は湯浅のために捧げられた。

www.th.u-psud.fr/YUASA150/Yuasa_event/entrance.html

23 このとき、ワトソンは湯浅からの手紙を同封していたが、それは返却するよう求められていたので、ジョリオはワトソンに返し、ジョリオが読んだ湯浅の手紙は残っていない。

24 『伝記』，note 17, p. 96；『肖像』，note 6, p.248.

25 『伝記』，note 17, pp.94-95. 湯浅は 1946 年には、この論文のほか、自分でもジョリオに知らせている『ピエール・キュリー』の和訳以外に、たくさんの原稿を書いている。中でも読売新聞に書いた「女性と原子爆弾」という記事は興味深い（読売新聞、昭和 21 年 4 月 1 日, p.4）。木村尚子「ある女性物理学者が与えた原子核のイメージ」『女性学年報』N. 33 (2012): 28-39 参照。他には、石原あえか「フランスに戻った湯浅年子、国外頭脳流出の先駆け」『パリティ』vol.23, n. 8 (2008): 58-62 が、この時期の湯浅の状況に詳しい。

26 『パリ随想』，note. 4, p.241；『パリ随想 3』，note. 4, pp. 217-229. 後者にある「ジョリ

オ先生への手紙」と題された短い章の中で、湯浅はジョリオからこの電報が来た1年前が1945年だと書いているので、電報は1946年に受け取ったと考えていい。この電報を1946年10月8日の手紙(Y.3)への返事とすれば、次の湯浅の手紙(Y.5)との話のつじつまが合うし、『湯浅文書』にこれ(Y.3)への返事に相当する手紙の写しがないのも納得できる。じつはこの電報を受け取った時期については、湯浅自身の書き方があいまいな上、山崎の伝記などを読むと、もっとあとの時期に受け取ったように読める(たとえば『伝記』, note 17, p. 105: 『肖像』, note 6, p. 251)ので、1947年以降だと思っている研究者もいる(Ito, "Gender and Physics," note 8, p.134)。この電報はお茶の水女子大学にも残っていない。しかし、前後の状況や、先の「ジョリオ先生への手紙」から、1946年の晩秋から暮れに受け取ったと推定するのが妥当であろう。

²⁷ サイクロトロン破壊後の理化学研究所の方針転換については、日記の中でも不満が述べられている。『日記』, note 4, pp.157-160。方針転換とは具体的に何を指すかと言うと、基礎研究より、応用研究や生産事業に結びついた研究が、所長の仁科によって奨励されたことである。ただし、仁科は宇宙線や原子核研究への未練も残していた。田島英三『ある原子物理学者の生涯』(新人物往来社, 1995), 108-109。これは占領下での研究所の存続を図ろうとした仁科の苦渋の決断だったが、湯浅にはこうした中途半端な「役に立つ科学」奨励の雰囲気は耐えがたかったのであろう。

²⁸ たとえばこのころ湯浅は、「女性と科学」と題されたエッセイを執筆し、『科学への道』と題した著書に収録している。当時、「女子の科学的能力は中等教育から男子に劣り始め、止まってしまう」と考える者が多数いた。しかし湯浅は、これは「止まる」のではなく、日本の教育が「止める」のだと反論している。というのも、フランスでは理学部に多数の女子学生がおり、成績も優秀で、そこからも女性が本質的に科学において男性に劣ることなどないと断言している。湯浅年子「女性と科学」『科学への道』(日本学芸社, 1947): 84-108。じつは『続・パリ随想』にも「女性と科学」と題したエッセイがある(note 4: 161-174)。これは1977年の一時帰国時に行った講演が下になっている。『科学への道』と重なる部分もあるのだが、初出の「女性と科学」にある、明白にフェミニスト的な主張はすべて削除されている。

²⁹ 『科学への道』, note. 28 (1947), p.23.

³⁰ 『肖像』, note 6, pp. 258-259.

³¹ Ito, "Gender and Physics," note 8, p.132.

³² アンドレ・オノラはパリの国際学生都市の創立者であり、国民議会議員、文部大臣などを歴任した高名な政治家でもある。オノラは日本文化への造詣も深く、国際学生都市の日本館の創設者である薩摩治郎八(1901-1976)の親友であった。オノラは日仏協会の会長も勤め、湯浅の博士論文出版に際しては、日仏協会が印刷費用の一部を負担するよう手配した。『パリ随想』には、このいきさつと、そのときオノラが湯浅に出した手紙の写しが掲載されている。『パリ随想』, note 4, pp. 12-14。薩摩もまた、湯浅たち戦時下の日本留学生の生活にはなにくれと気を使い、滞在先のニースから花やみかんなどをパリの湯浅に送っている。『パリ随想 3』, note 4, p.135; 『日記』, note 4, pp. 77-78, 95; 村上紀史郎『「バロン・サツマ」と呼ばれた男、薩摩治郎八とその時代』(藤原書店, 2009), p.310.

³³ Tc. 8, 『湯浅年子 公開資料目録』, note 2, p. 57.

³⁴ すべて複数形なので、東京女高師や理化学研究所以外でも、湯浅が出入りしていたあらゆる学校や研究所とみるべきであろう。

³⁵ 湯浅のフランス行きは、1948年の暮れには決定していた。というのも、本文図2の写真でわかるが、すでに東京女高師の学生と一緒に、12月21日に送別会をしているからである。『湯浅年子公開資料目録』には、このときの写真が残っている。送別会はさらに別のメンバーで、出発直前の1949年2月にも行われている。『湯浅年子公開資料目録』note 2, pp. 60, 63.

36 エレーヌ・ジョリオとミシェル・ランジュヴァンの結婚通知. お茶の水女子大学所蔵.

Tc. 9, 『湯浅年子 公開資料目録』, note 2, p. 57.

37 このときの花嫁, エレーヌ・ランジュヴァン=ジョリオは, 両親のあとをついで原子核の研究者になり, 再渡仏した湯浅から, 父の職場であるコレージュ・ド・フランスで実験指導を受けている. 湯浅亡き後は, オルセーの研究所で日仏共同研究のフランス側責任者となった. エレーヌは湯浅追悼行事のために何度も来日し, 当時の思い出を語っている.

エレーヌ・ランジュヴァン=ジョリオ「思い出の湯浅年子先生」『肖像』, note. 6: 293-301.

38 「東京女高師の教官室には, 研究者をはじめとする多くの人々が, 頻りに年子を訪れるようになっていた. [...] 戦後しばらくは, 最新の欧米の研究雑誌が送られてくる唯一の研究室でもあった. とくに戦後の迷いの中にいる若い研究者たちが, 年子の話から, 進むべき道の手がかりをえようとしていたのである. そこでも話題は, フランスおよびドイツの物理学, 科学, 科学者たちの世界にとどまらず, 文学, 芸術, 人物論から社会情勢にまでおよび, アカデミックなサロンのような場がしばしば実現していた.」『伝記』, note. 17, pp.96-97.やはり湯浅の教え子の一人, 天文学者の神谷美子の証言も, 山崎のこの話を裏付けている. 神谷美子「恩師湯浅年子先生」『肖像』, note 6, pp. 370-371. 注 25 でも述べたが, 湯浅はこの時期, 雑誌や新聞にたくさんの原稿を書いており, 一般にも当時の日本の知識人の一人と見なされていた. 『湯浅年子公開資料目録』, note 2, pp. 32-24.

39 田島英三は湯浅の東京文理大の3年後輩の科学者であり, 当時は仁科が率いる理化学研究所にいた. 湯浅も客員としてここにいたので, 二人は留学の話をするようになったのである. 福田陸太郎は東京高等師範学校の卒業生で, 当時は母校の教員をしていた. 東京女高師の湯浅とはそういう意味での兄弟姉妹校仲間ともいえる. もともとは英米文学の専門家だったが, 湯浅と同じ1949年に渡仏し, ここで本格的に比較文学の手法を学び, 帰国して日本比較文学会の創立メンバーとなった. ただし福田側の史料では, この留学は日本の文部省から命じられたものとある. ここでジョリオやオノラがそれにどの程度助力したのか, したとして, それが福田の留学に効果があったのかどうかは不明である. 福田陸太郎『福田陸太郎詩集』(土曜美術社, 2001), p.137.

40 たとえば『日記』, note 4, pp. 86, 160, 188, 225: 『パリ随想』, note 4, p. 3: 『伝記』, note 17, pp. 11, 17, 100-101, 130 など多々ある.

41 田島『ある原子物理学者の生涯』, note 27, pp. 119-121. 湯浅文書の6番(Y.6)が, このとき田島が作った履歴書の一部であろう. 本論にあるように, 湯浅はこの年の9月にジョリオに対して, シカゴの同じ研究所から誘われているとある. これは, シカゴ大学が日本人を2人招聘しようとしたのか, あるいは湯浅が断ったから田島を招聘したのかのどちらかであろう. このように, アメリカに行った田島の方が湯浅のことを書き残しているが, フランスに行った福田は, 私が見た限りでは著作集の中でも, 湯浅についての記述を残してはいない. 福田陸太郎『福田陸太郎著作集』, 7vols. (沖積社, 1998-1999).

42 田島と対照的に, 福田の履歴書はフランス語で書かれており(Y.8), 多分オノラにあてた手紙に同封されていたと思われる.

43 『パリ随想』, note. 4, pp.211, 222.

44 『肖像』, note 6, p.253.

45 この問題については, ジョリオ=キュリー夫妻の伝記を比較すると非常に興味深い. 特にイレーヌのそれでは, 湯浅による短い評伝(「イレーヌ・ジョリオ・キュリー夫人」『続・パリ随想』, note. 4: 170-174.)に顕著だが, すべてにイレーヌの, 無愛想で冷たい第一印象とは異なる「心の優しさ, 繊細さ, 女らしさ」といった話が出てくる. マリー・キュリーの伝記の中でのイレーヌに関する記述にも同じ傾向が見られる. ところがフレデリックの伝記には「フレデリックの本当の優しさ」などという表現は一切なく, 彼は誰から見ても感じの良い人物であったと書かれている. これは当時ふたりがどのように比較され, イレーヌがフランスのジェンダー規範からいかに離れていたかを雄弁に物語っている. この

ふたりの伝記については以下のものを参照した。ノエル・ロリオ、伊藤力司・伊藤道子訳『イレヌ・ジョリオ・キュリー』（共同通信社、1994）/ Noelle Loriot, *Irène Jliot-Curie* (Paris, Presse de la Rnaissance, 1991); ザビーネ・ザイフェルト「イレヌ・ジョリオ＝キュリー」セアラ・ドライ、増田珠子訳『科学者キュリー』（青土社、2005）：185-212; Louis-Pascal Jacqmond, *Irène Joliot-Curie* (Paris, Odile Jacob, 2014); マリアンヌ・シャスコリスカヤ、高倉太郎訳『ジョリオ＝キュリー伝』（理論社、1961）; ビカール『F・ジョリオ＝キュリー』, note 16; Michel Pinault, *Frederic Joliot-Curie* (Paris, Odile Jacob, 2000).

46 「イレヌ・ジョリオ・キューリー夫人」, note.45.

47 これについては、湯浅と仲の良かった物理学者の坂井光夫も「それにしてもフランスという国はなんという素晴らしい国だろう。もちろん、細かい点を見ればいろいろのことがあったにせよ、〔湯浅〕先生が30年以上も、しかも定年後もなお研究を続けることができたという、その懐の広さ、寛容さは、異文化を包含することから新しい文化の創造の活力が生み出されるという伝統的な考え方と、自国の文化に対するしたたかな自信に起因するものであろう。日本ではまったく考えられぬことである」と述べて、フランスの寛容さを賞賛している。坂井光夫「鎮魂 湯浅年子先生」『自然』5月号(1980): 58-63, p.63. ここにある「定年後」の話は、山崎が伝記の中で説明している。それによると、湯浅に対しては、定年後も期限を定めずに「研究費、人員、物件を〔湯浅の〕仕事に支障がないように手当てする」という、CNRSでもほとんど例を見ない特別措置がなされたという。『伝記』, note 17, pp. 166-167.

48 『日記』, note.4, p.164. 湯浅の最初の渡仏は神戸の港からであった。『続・パリ随想』, note. 4, p.212.

49 『パリ随想』, note. 4, p.242. 湯浅はこの時、フランス側からシンガポールの滞在費を受け取っている。『湯浅年子資料目録 続』, note 2, p.22.

50 『日記』, note. 4, pp. 172-176. 『パリ随想』, note. 4, pp.241-243.

51 『日記』 note. 4, pp. 168-169. 結果としてこれが、戦後の日本での科学者の頭脳流出第一号となった。Ito, “Gender and Physics,” note 8, p. 32.

52 『日記』, note. 4, p.173.

53 『日記』, note. 4, p.171.

54 『パリ随想』, note. 4, p.239.